

氏名（本籍） ^{すぎはら}杉原 ^{みか}弥香 （岡山県）

学位の種類 博士（医学）

学位授与番号 甲第 670 号

学位授与日付 平成 31 年 3 月 14 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

学位論文題目 Does local infiltration anesthesia on laparoscopic surgical wounds reduce postoperative pain? Randomized control study

審査委員 教授 中塚 秀輝 教授 佐藤 健治 教授 上野 富雄

論文の内容の要旨・論文審査の結果の報告

婦人科腹腔鏡下手術の術後疼痛管理において、局所麻酔薬によるポート刺入部への浸潤麻酔の有効性を検討した研究であり、侵襲度の異なる様々な術式において検討が加えられている。論文では、ポートサイトへの局所麻酔薬の浸潤麻酔を行うことにより、婦人科腹腔鏡下手術の中でも手術侵襲が大きい子宮全摘術および骨盤リンパ節郭清術を含む子宮全摘術で術後痛が軽減するとの結果が得られたことが報告されている。通常、ポートサイトへの浸潤麻酔では、体表痛、すなわち創部痛が主に軽減されると予想され、侵襲の大きな術式においては体表の創部だけではなく、腹部組織の炎症などに由来した術後痛の影響が大きいと考えられる。侵襲の小さな術式で術後創部痛の軽減が明らかではなく、侵襲のより大きな術式で浸潤麻酔が有効であるというこれまでの知識異なる結果が得られたことに対する検討が今後さらに必要ではないかと考えられた。

論文の背景の中でも、研究のポート刺入部の浸潤麻酔では有効でなかったとする報告も多いことが述べられ、有意差を証明するには相当数の対象者が必要と想定されていた。さらに背景で、術後疼痛の軽減により患者満足度の上昇につながる言及があるが、本研究では検討されていない。また、中間発表の時点で研究計画が十分な新規性が期待できるような研究課題であるかどうかという点も危惧されていた。導き出された結論からは、現時点で今後の科学・医学において重要な意義を持つ知見の公表としては十分ではないが、294例の前向き比較試験を行い、英文にまとめたという努力は十分評価に値する。本研究を通じて、研究の難しさが十分に認識できていると思われる。結語にあるように、今回の研究は端緒に就いたばかりであり、真価を問えるような研究へとさらに発展させる意図も持っていることから、今後への期待も含めて学位論文として価値があるものと認める。

学位審査会（最終試験）の結果の要旨

学位審査会でのプレゼンテーションは落ち着いた口調で、聞き取りやすく、スライドも見やすくわかり易いものであり、発表および論文に書かれている研究内容についての審査員からの質疑にも丁寧に応答できていた。後日、より詳細な研究内容を確認するために行った追加審査時にも、丁寧に十分な回答が得られた。

委員からは、主要評価項目としての「術後 12 時間の鎮痛薬の使用量総量」、および、副評価項目としての、「追加鎮痛薬の使用の有無と術後 1 時間と 2 時間後の VAS の評価」が適切に行われていたかどうかに関して様々な視点からの質問がなされた。投与する局所麻酔薬投与量の設定、術後疼痛に影響を与える術中オピオイド鎮痛薬使用量の検討、追加鎮痛薬使用時の選択など、今回設定された評価項目に影響を与える多くの因子に関する疑問点について質疑応答が行われた。また、対象者数設定の power analysis の手法、結果の考察に関して浸潤麻酔をした群において術後創部痛が強いという矛盾する結果、研究対象数が非常に少ない中でのグループ分け後の解析など、結論を導くには十分でないと考えられる点に関しても質疑応答がなされた。多施設共同研究として十分な施設の参加が得られなかったこと、先に述べた様に大学院中間発表報告書で指摘されたこと、がんプロ大学院コースとしての成果などの点からも、研究立案時から研究の方法について、より十分な検討を加えた上で研究を開始する必要があることが指摘された。

手術後の痛みという臨床に直結する重要な課題に対して、前向き研究として真摯に研究に取り組み、英語論文という成果を出したことは評価された。今回の経験を活かして、十分に解明できなかった疑問点の解決に向け研究を継続することへの期待については、審査委員の意見が一致した。

以上より、審査委員 3 名は申請者が学位審査会において合格と判定した。